

アサガオの立場になって世話を考えることによって、 これからの栽培活動への見通しをもつ学習

～1年「きれいにさいてね わたしのはな」の実践を通して～

林 裕 輔

I はじめに

全体研究の3年次のテーマ「子供が学びをつなぐ学習づくり」を受け、生活科の3年次研究では、児童自身が学びをつないでいけるような学習について研究を進めた。

次期学習指導要領では、『資質・能力』の育成のためには、『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図る』ことが鍵となる。単に思いや願いを実現する体験活動を充実させるだけではなく、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行き来する相互作用を重視するなど、気付きの質を高めることを意識することが大切である。」とされている。このことから、今まで大切にしてきた気付きの質を高める学習が主体的・対話的で深い学びであり、「資質・能力」の育成につなげることができる。気付きの質を高める学習を構築するために大切にしたいことの一つが表現活動の工夫である。充実した体験活動の学びを次の体験活動につなげるには、表現活動を児童の思考に沿ったものとなるよう工夫していくことが不可欠である。

そこで、生活科3年次研究のテーマを「相手や目的を意識した表現活動により、次の学びに生かす生活科の学習づくり」と設定した。気付きを確かなものにしたり、新たな気付きを得たりするため、多様に表現し考えることのできる表現活動について研究を進めた。



世話の仕方を見通す児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童自身が学びをつないでいくことができる表現活動について明らかにすることである。そのために、以下の2つの視点から、授業実践「きれいにさいてね わたしのはな」における児童の様子について分析する。

- ① 児童の思考を整理する板書と発問の工夫
- ② 適切なフィードバックのための評価規準の具体化

なお、研究の対象とした単元の概要は以下のとおりである。

1 単元名 「きれいにさいてね わたしのはな」

2 単元の目標

アサガオを育てる活動を通して、育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち働き掛け、生命をもつことや成長していることに気付くとともに、世話をし育てることができた自分自身の成長にも気づき、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

3 単元の概要

本単元は、学習指導要領内容(7)「動植物の飼育・栽培」、及び内容構成の具体的な視点「身近な自然との触れ合い」「ク 時間と季節」を基に構成されている。

アサガオを育てることを通して、生命の尊さを感じるとともに、上手に世話をできるようになった自分自身の成長に気付く姿を期待している。

そのために、本単元では、まず、2年生から一人一人にアサガオの種をプレゼントされ、自分一人で育てることに挑戦した。次に、「きれいな花を咲かせたい。」「自分たちも種をプレゼントしたい。」という思いや願いをもち、アサガオに心を寄せ、変化や成長に応じて世話を工夫していくことができるようにした。最後に、アサガオと過ごしてきた日々を振り返ることを通して、自分も成長してきたことに気付くことを目指した。

Ⅲ 結果と考察

1 児童の思考を整理する板書と発問の工夫

(1) 結果

これまでの世話の様子やアサガオ日記の記述内容等から、児童が感覚的に「水」「土」「日当たり」の大切さに気付く、世話が続いていることが分かっていた。そこで、本時では感覚的に分かっている「水」「土」「日当たり」についての気付きを中心に、板書において整理をしていった。

「水」については、水の量について気を付けて世話をしている児童を紹介し、それぞれどのくらいあげているのかを問うことで、自分なりに考えて世話をしていることを自由に発言する児童が増えた。「あげすぎじゃない。」という児童のつぶやきに対して、「あげすぎはよくないの。」と教師が返すことで、「アサガオが溺れてしまう。」とか、「根が柔らかくなりすぎて、心配。」等、児童の発言がつながり、適切な水の量について自覚させることができた。また、「だけど、暑い日はよく乾くからたっぷりあげないといけないよ。」という児童の発言を、「暑い日の世話」として板書で整理することで、「雨の日は少しにしているよ。」等、天気による世話の仕方の違いについて考えることができた。さらに、「休みの日の水も考えないといけないよね。」という発言について発問することで、「下からも水を吸うから、ペットボトルを反対向きにすればいいよ。」など、発言が繋がっていった。

「日当たり」については、アサガオの鉢を移動している児童を写真で紹介することで、自分なりに工夫して場所を決めていることについての発言が増えた。「朝はこっちから太陽が当たっているから、アサガオの向きも気にしているんだ。」と発言する児童がいる等、日当たりについて考えることができた。

「土」については、「アサガオの花は50から80個咲くけど、たくさん咲かせるには、元気がないのは引っこ抜かないといけない。」という発言から、「かわいそう。」「根っこが心配。」「葉も傷ついてしまう。」など、自分なりの思いを口々に言う児童が出てきた。土の栄養を考えての発言が多くあったが、児童がまだ交流したい様子で本時が終わってしまった。板書を残し、次時に「水と太陽のことを気にしてお世話をしていくんだね。」と話す時、「土も気にしているよ。」というつぶやきがあった。問い返すと、「アサガオだって御飯が必要だよ。」「植えるときにも土につぶつぶ入れたよ。」「肥料を2年生の先生がくれたんじゃない。」など発言が繋がっていき、肥料に対する必要感が高まっていった。(写真2)そこで、2年生の先生からプレゼントされた肥料を児童に渡し、追肥を行った。



写真1 肥料のプレゼント

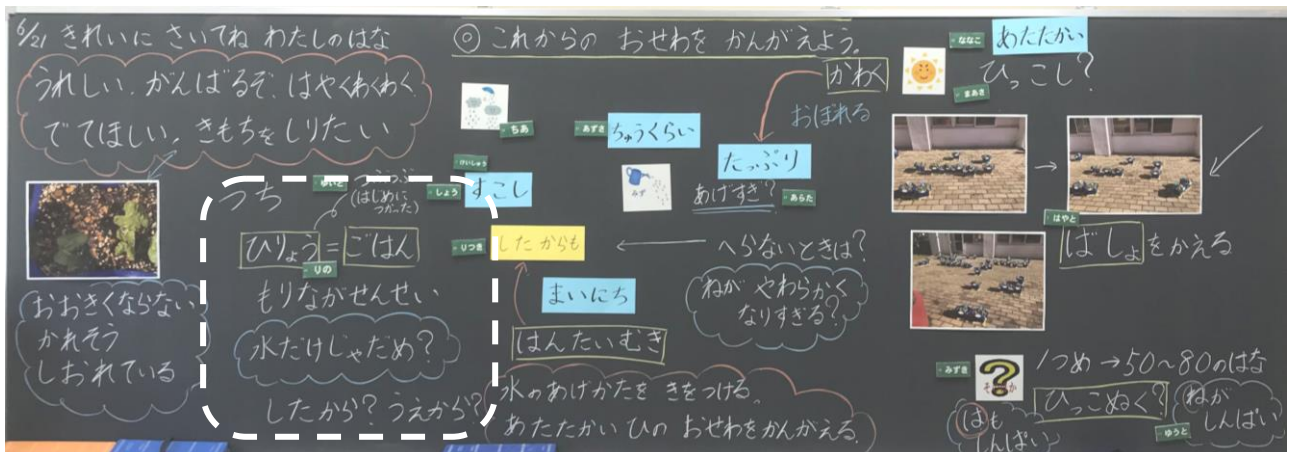


写真2 次時に交流した後の板書 ※点線が追記

(2) 考察

児童のこれまでの世話の様子を基に、教師が思考を整理する視点を「水」「土」「日当たり」で分類し、それぞれの気付きを関連付け、板書で整理したことは効果的であったと考える。このことは、「水はたっぷりあげないといけないよ。」という児童に対して、「でも、アサガオが溺れてしまう。」「だけど、暑い日はよく乾くからたっぷりとあげないといけないよ。」と、児童が発言をつなぎ、「水」と「種」、「水」と「日当たり」等について関連付けて考えていることから判断できる。

特にA児は「休みの日の水も考えないといけないよね。」という発言に対して、「下からも水を吸うから、ペットボトルを反対向きにすればいいよ。」と「土」と「水」について関連付けた発言をしていた。また、B児は、「雨の日は、少ししかあげなくてもいいよ。雨がかわりにあげてくれるから土も濡れている。」と「水やり」と「天気」を関連付けた発言をしていた。

今後は、交流を通して自分のアサガオにあった世話を見通し、世話を実際に試し、学習を終えるなど一単位時間の充実も必要であると考え。本実践は、「水」「土」「日当たり」という視点で一度に交流したが、「水」の視点で交流している際に、「自分のアサガオに水をあげないと。」と思った時点で、実際に水をあげにいくなど、児童の思考に沿った活動の組み合わせも考えられる。表現活動により児童の目的意識や相手意識が明確になり、思いや願いをもって行為しようとしている時に体験活動を行うなど、単元だけではなく一単位時間の中でも児童の学びがつながるような手立てや活動の設定を考えていくことが、次の学びに生かす生活科の学習につながると考える。

2 適切なフィードバックのための評価規準の具体化

(1) 結果

本単元では、アサガオの栽培を通して、一人一人が自分自身の成長に気付き、生き物への親しみをもち、大切にしようとすることを目指した。そのためには、児童一人一人の気付きと、思いを教師が把握し、適切な働き掛けをしていくことが大切であると考えた。

そのための手立てとして、評価規準の具体化と支援を要する児童への手立てを明確にした。本時の評価規準「植物を育てることについて、自分なりに考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それを素直に表現している。」の具体化は、上記の規準と、本時までの児童の世話の様子や発言などの見取り（資料1）から設定した。支援を要する児童の手立てについては、アサガオの発育不良がある児童、充実感を感じていない児童に対して有効であるかどうかを中心に考えた。

本時では、自分のこれからの世話について考える時間を設定し、適切な働き掛けをしていった。C児（資料1の①）は、本時までには発育不良の自分のアサガオについて不満があり、本葉が出る前に引き抜いたり、「もう育てたくない。」と言ったりして、わざと水をあげないようにすることもあった。しかし、C児はアサガオの育て方を学級にある本で継続的に調べる様子があり、水のやり方や花が咲くまでの日数等を伝えてくることもあった。そこで、事前にC児だけが知っているアサガオの知識を想起させるための言葉掛けとして、「今日はどんなお世話が必要なの。」を想定しておいた。理由は、C児は、花が咲くまでの日数や、つるが伸びてきた時の世話の仕方、暑い日が続く時の世話の仕方などを、本で調べていたからである。

本時において、アサガオ日記を書く場面に声を掛けたことによって、「明日は、休みだからお水をたっぷりあげるんだ。」と伝えていた。また、その後の世話では、毎朝の水やりや雑草取りの世話を友達と楽しく行う様子があった。そして、初めて花が咲いた時には、朝の会で嬉しそうに伝えていた。

「死なせたいから雑草入れたんだ。」
水を大量に入れる。じっくりみたらカード、「わー雑草だ。」「もう育てたくない。」

黒板

資料1 前時までの見取り

(2) 考察

適切なフィードバックのための評価規準の具体化は、概ね効果的であったと考える。このことは、本時の後にC児が朝の水やりで水の量やあげ方に気を付けていたことや、鉢を移動していたことから判断できる。特に、花が咲いた時に嬉しそうに友達に伝えるなど、アサガオへの関わりが変わり、世話を続けていることから判断できる。

このように、評価規準の具体化は大切であるが、見取るのが難しい場面や規準に達しているのか判断に迷うことが多くある。今後も継続して研究を進めていく必要があると考える。

IV まとめ

本研究では、気付きの質を高め、児童自身が学びをつないでいくための、表現活動の工夫について明らかにしようとした。そのために、「児童の思考を整理する板書と発問の工夫」「適切なフィードバックのための評価規準の具体化」の2点について、「きれいにさいてね わたしのはな」の実践を基に論を展開した。以下に成果と課題を示す。

1 成果

- 教師が明確な視点を持ち、児童の気付きを、その視点に基づいて板書で整理することで、新たな気付きが生まれ、自分自身の体験活動に生かしていくことにつながった。
- 活動において目指す児童の姿を明確にし、適切な働き掛けをすることで、児童一人一人がよさを学びで発揮させることができた。
- 教師が適切な働き掛けを続けることで、児童は学習対象への思いを強くもつようになり、自信をもって積極的に関わっていくことができるようになった。

2 課題

- 一単位時間の学習の充実についてもさらに考えていく必要がある。例えば、「振り返り、見通す表現活動」と「実際に試す体験活動」を一単位時間に組み込む等、体験活動と表現活動の組み方については、さらに研究を進めていく必要がある。
- 単元や一単位時間での評価規準の設定の仕方と指導への生かし方については、さらに研究を進めていく必要がある。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 平成29年6月
- 初等教育資料 No. 951 「生活科における改訂の具体的な方向性」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年3月
- 初等教育資料 No. 954 「学習指導要領改訂のポイント 生活科」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年6月
- 初等教育資料 No. 960 「生活科における主体的・対話的・深い学びの実現に向けた授業改善」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年10月
- 初等教育資料 No. 968 「生活科における資質・能力の育成に向けた授業づくり」
文部科学省 東洋館出版社 平成30年6月
- 新教科誕生の軌跡 吉富芳正 田村 学著 東洋館出版社 平成26年6月
- 教育の効果 ジョン・ハッティ著 山森光陽監訳 図書文化 平成30年2月

生活科部会

司会者 松井 芳樹（旭川市立東光小学校教諭）
助言者 佐藤 由佳（上川教育局義務教育指導班指導主事）
高橋 一寛（旭川市立啓明小学校長）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

児童の思考を整理する板書と発問の工夫

- 振り返って何を考えさせたかったのか。
→栽培する場所や日当たり，水のあげ方など，これまでの世話で児童が考えて行っていることを自覚化させたり，共有化したりしたかった。
- 考えてやっていることに気付かせ，考えていなかった子に考えるようにしたかったように見えた。どんなことを考えている子が多かったのか。
→当日資料のフィードバック用児童の見取りの通りである。支援が必要な児童が分かるようになっている。また，自分たちでどんどん工夫して世話を続けている児童も色分けしている。
- 困り感があつたのかどうか。もし，ないなら，この授業で「考えよう」というのは適当だろうか。その意図は。
→困ってからでは難しいと考える。発達段階を考えると，1年生は困り感というのに鈍感である。自分はいまうまくいっているけれど，こういう人もいるんだ等，視点が増えることをねらって授業を組んだ。
- 困り感がない。だから，児童の思いと先生の思いをすり合わせる。知らなかったということに気付くことを目的にしてもよかった。「葉っぱが茶色なのが心配な子がいるんだ。」「悩みのある子が結構いるんだ。」等。

適切なフィードバックのための評価規準の具体化

- 振り返りについては，ある程度自由度を持たせるのがよいと感じている。視点を明確にすることで助かる児童もいるが，そのことで振り返ろうという気持ちが減退してしまう児童もいる。振り返りによる児童の見取りをどうしていくのかを提案してくれるとありがたい。
- 児童の中には言葉を書いていない子もいた。そうなるで見取ることができないのではないかと。
→時間を十分に取ってあげられればよいが，あげられないこともある。そのため，アサガオ日記に気分を表す顔を書くところと，題名を書くところを作った。この2つは，5分以内でほぼ全員の児童が書くことができる。アサガオの育ちが順調そうでも悲しい顔にする児童もいる。そのような時には，問い掛けたり，アサガオの様子を一緒に見に行ったりするなど適切な働き掛けをしている。

授業の構成について

- 全体交流の中で児童が言葉をつなぎ，新たな視点を見付けたり，自分なりの工夫を一生懸命語ったりする姿があり，とても面白かった。しかし，序盤は難しかったように感じた。今までの世話を想起させるための，写真や動画の活用は，手立てとしては効果的であったのかどうか。水のあげ方だけでも，あんなに深めていける児童(例えば，夜あげなくていいのかという新たな視点を自分たちで考え出す等)が多くいた。また，「自分は大丈夫だ。」と思っている児童ももう一度考え直そうとしていたので，どうすれば，最初からできたんだろうかと思った。



II 助言者からの講評

(1) 佐藤 由佳 指導主事から

「目的意識はどうだろう。」「自分事になっているかな。」と、一人の子を追って見ていたのだが、その子は授業の終末でアサガオ日記を書く時に葉をずっと触っていた。裏側まで見ていた。その子は、相談ボードを使ってグループで話し合っている時は、あまり参加できていなかった子だった。しかし、アサガオ日記の時に、「見えないんですけど、ぼさぼさで」とつぶやき、自分のアサガオの成長に気付いていた。話し合いや全体での発表で目立つ発言はないにしろ、その児童は、自分のアサガオを注意深く観察し、アサガオの成長に気付いていた。やはり気付きが大切だなと感じた瞬間だった。その子は、「前は、全部緑だったが、一枚だけ薄緑だった。」とつぶやき、それに、若葉にも気付いていた。彼なりの学びがこの時間であったことが分かった。

一人一人が必要感をもって、「何でかな。」と考えることが大切である。子供一人一人が必要感を持ち学びに向かうことができていた。そして、先生が一人一人に合わせて関わっていくことで、いろいろなことに気付いていく児童の姿があった。

ある児童は、「雑草を引っっこ抜いたら、他の土に戻す。」と発言すると、先生が「そうだね。そうしてあげるといいかもね。」と返していた。先生自身が生命を尊重していこうという気持ちがよく伝わり、そこが何より大切な教師の姿勢だと感じた。

(2) 高橋 一寛 校長から

3年間の研究、すべてを見ることができた。まとめの今年の授業が今までで一番よかったと思う。

これからの教育で大切なのは、「何を学ぶか」である。そのためには、附属幼稚園と今までよりも上手く連携していく必要があると思う。具体的には、カリキュラムマネジメントの視点での連携が求められる。そして、それを発信していくのが附属の使命としてあると感じている。他の学校の先生に「こうやってやるんだ。」とか、「これが生活科で求める資質・能力なんだ。」と分かるようにしていくことを今後も期待している。

二つ目は、「どのように学ぶか」である。世話の仕方を交流することで「自分の工夫」につなげるのである。「自分との関わり」で対象を捉えることが、生活科の見方・考え方のポイントである。本時では、児童の気付きを分類したり、関連付けたりして板書することで、思考を整理し気付きの質が高まるようにしていた。指導面の課題は残るものの、方向性は確かである。板書で世話の仕方を列挙するだけでなく、「土が乾いているから、水やりが必要」とか、「成長が遅いから、肥料が必要」と、高めていければ最高である。これまでの活動を振り返る場面で対話しながら試行錯誤することで新たな気付きが生まれる授業改善が必要である。これが「深い学び」の具体的な姿である。

最後に3つ目が、「何ができるようになるか」についてである。評価規準が具体化されていたので、この後の活動で「お世話を頑張っている自分」に気付くことができるはずである。本時も、目指す姿を明確にすることで、適切な指導を目指していた。

いよいよ来年は完全実施なので、幼児教育で身に付けた「10の姿」が授業の中でどう生かされ、それを基に生活科で培う資質・能力がどの程度定着したのか見取る評価についても提案していただきたい。

